

ポスト資本主義に向けた強者と弱者のコペルニクスの転回を願って －ボン教に学ぶ「弱者を生き抜く智恵」－

概要

京都大学こころの未来研究センターの熊谷誠慈准教授は、チベット・ヒマラヤ地域の土着宗教である「ボン教」※1 についての研究を進める中で、国内外の研究者とともに、ボン教が培ってきた「弱者を生き抜く智恵」を分析し、公表しました。

産業革命以後、人類は、劇的な速度で科学技術と経済を発展させ、物質的な豊かさを享受してきました。しかし、資本主義の宿命として、持てる者（資本家）と持たざる者（労働者）との経済格差は広まる一方です。今回のコロナ禍でも、世界の富裕層が何百兆円もの資本を増やす一方で、貧困層はさらに貧しくなっている状況が散見されます。貧富の格差が進めば、多くの貧困層はますます貧困に、そして弱者となっていかなざるを得ないでしょう。

そうした格差をなくすための取り組みも進まず、打つ手がないのが現状です。弱者はこのまま閉塞感や苦悩を抱いたまま生き続けるしか術はないのでしょうか。

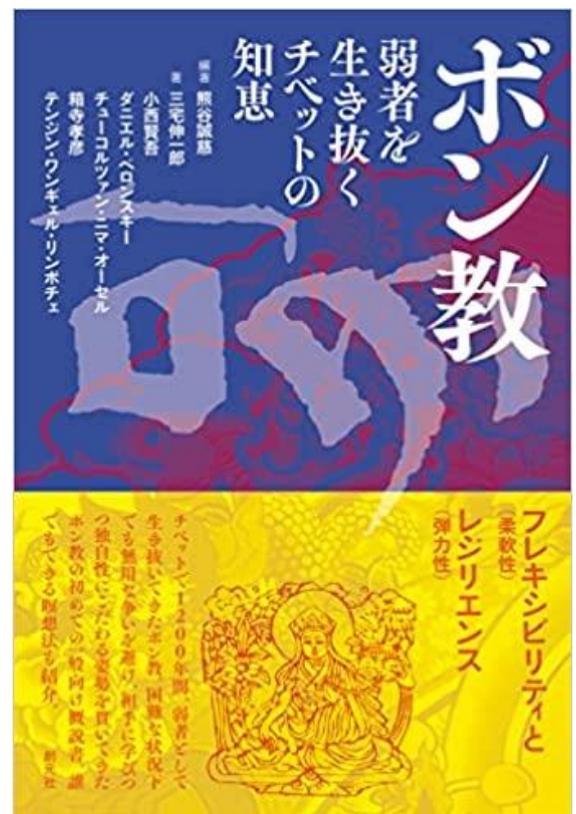
8世紀にチベット・ヒマラヤ地域で仏教が国教化して以降、ボン教は1200年もの間、宗教マイノリティとして、時に弾圧を受けながらも生き残ってきました。多数派の仏教徒たちと闘わず、しかし、自らのアイデンティティは誇りをもってしっかり守る。そのために、相手の良い部分をしっかり採り入れて根幹の教義を変えるなど、ボン教は「弱者を生き抜く知恵」を身に付けてきました。

結果、1980年代には、ボン教はチベット亡命政府から伝統宗派の一つとみなされるようになり、1200年をかけて「宗教マイノリティ」から「チベットの基層文化」へと、その地位を回復させることに成功しました。

ボン教の研究者は国際的にも数が少なく、その全容の把握は極めて困難な状況でした。そこで本研究では、国内外の新進気鋭のボン教研究者たちとともにボン教を多角的に概観したうえで、ボン教徒たちが培ってきた「弱者を生き抜くチベットの知恵」を抽出し、そのフレキシビリティ（柔軟性）とレジリエンス（弾力性）を明らかにしました。

ネガティブな状況をポジティブに生きるためのボン教の智慧は、先行き不透明な（ポスト）コロナ時代の社会においても、きっと多くの人の役に立つものと願っています。

本研究成果は、「ボン教：弱者を生き抜くチベットの知恵」として、2022年1月14日に出版されました。



1. 背景

産業革命以後、人類の経済発展は目覚ましいものとなりました。しかし、資本主義の宿命として、持てる者（資本家）と持たざる者（労働者）との経済格差は広まる一方です。今回のコロナ禍でも、富裕層が莫大な資本を増やす一方で、貧困層はさらに貧しくなっている状況が散見されます。

例えば、アメリカのビリオネアは、2020年12月31日から2021年12月31日の間に、1兆ドル以上の資産を増やしたとされています。今後、貧富の差はますます広がることが予想され、多くの貧困層はますます貧困に、そして弱者となっていかなざるを得ないでしょう。

そうした格差をなくすための取り組みも進んでおらず、打つ手がないのが現状です。弱者はこのまま閉塞感や苦悩を抱いたまま生き続けるしか術はないのでしょうか。その解決策の手がかりの1つとなりそうな宗教が、古代のチベット・ヒマラヤ地域に存在します。

それは、「ボン教」^{注1}と呼ばれるチベット・ヒマラヤ地域の土着宗教です。ボン教は、8世紀に同地域で仏教が国教化して以降、1200年間、宗教マイノリティとして、時に弾圧を受けながらも生き残ってきました。

多数派の仏教徒たちと闘わず、しかし、自らのアイデンティティは誇りをもってしっかり守る。そのために、相手の良い部分をしっかり採り入れて根幹の教義を変えるなど、ボン教は「弱者を生き抜く知恵」を身に付けてきました。

結果、1970年代には、ボン教はチベット亡命政府から伝統宗派の一つとみなされるようになり、「宗教マイノリティ」から「チベットの基層文化」へと、その地位が高まりました。

ボン教徒たちの培ってきた「弱者として前向きに生き抜く知恵」は、国と時代を越えて、現代の国際社会においても有用ではないかと思われます。

しかし、このボン教については、これまで国際的にも研究が大幅に遅れており、その全容は未解明のままです。わが国では、御牧克己氏（京都大学・名誉教授）や長野泰彦氏（国立民族学博物館・名誉教授）などが、世界的なパイオニアとして、ボン教研究の基盤を構築してきました。また、現存するボン教研究のほとんどが外国語で書かれたものであることから、日本語でボン教について知ることは極めて困難な状況にありました。

そこで、2022年1月14日、京都大学こころの未来研究センターの熊谷誠慈准教授は、編著『ボン教：弱者を生き抜くチベットの知恵』（創元社）を出版し、国内外のボン教研究者と共同で多角的にボン教を概説するとともに、「弱者として前向きに生き抜く知恵」を抽出し、公表しました。

2. 波及効果

本書は、国内外の新進気鋭のボン教研究者たちによる、本邦初の一般向け概論書として、高い学術的な価値を有しています。他方、本書は単なるボン教の説明にとどまらず、ボン教が弾圧のなかでもアイデンティティを守りながら前向きに生き抜いていくために構築してきた、フレキシビリティ（柔軟性）とレジリエンス（弾力性）をサブテーマとしています。いち民族宗教の研究としてのみならず、未来社会の人々が幸せを手に入れるためのヒントを与える可能性がある点で、本書は大きな社会的意義をもつものと思われます。

くしくも、同書出版と同じ1月14日の午前には、天皇陛下が各学問分野の第一人者から講義を受けられる「講書始の儀」という皇室行事が、皇居・宮殿「松の間」で開催され、インド・チベット仏教学を専門とする御牧克己・京都大名誉教授（74）をはじめとする3人の学者がご進講しました。

御牧氏の講義タイトルは「ボン教研究の新段階」。天皇陛下をはじめとする日本皇族がボン教についての講義をお聞きになり、また、各種メディアを通じて「ボン教」という宗教名が全国に発信されました。今後、皇室関係者のみならず、多くの国民がボン教について触れていくことができれば、あるいは、ボン教の知恵を様々

な局面に応用して社会に還元することができれば、日本全体をとりまく空気を、少しでも前向きなものにすることも不可能ではないでしょう。

ネガティブな状況をポジティブに生きるためのボン教の智慧は、経済格差のみならず、さまざまな形での紛争を回避するための智慧として、今後の国際関係改善のためのヒントにもなることが期待されます。本書が、先行き不透明な（ポスト）コロナ時代の社会においてもきっと多くの人の役に立つものになることを、著者一同、こころより願っております。

<書籍タイトル、目次、著者>

タイトル：ボン教：弱者を生き抜くチベットの智慧

序章 ボン教とは（熊谷誠慈）

第1章 ボン教の歴史（三宅伸一郎）

第2章 ボン教の文化：ボン教僧院と地域社会（小西賢吾）

第3章 ボン教の儀礼（ダニエル・ベロンスキー）

第4章 ボン教の思想（熊谷誠慈）

第5章 ボン教教義における密教の位置づけ（ニマ=ホジェル・ラマ）

第6章 はじめてのゾクチェン瞑想——あなたの人生を支える大楽の瞑想（箱寺孝彦）

第7章 ボン教の呼吸法：ボン教のヨガが人体に及ぼす影響（テンジン・ワンギェル・リンポチェ）

第8章 ボン教のドリームヨガ（テンジン・ワンギェル・リンポチェ）

終章 弱者を生き抜くチベットの知恵：ボン教に学ぶフレキシビリティとレジリエンス（熊谷誠慈）

出版社：創元社（2022/1/14） ISBN-13: 978-4422140308

<用語解説>

1. ボン教：チベットやヒマラヤの土着宗教。8世紀にチベットで仏教が国教化して以降、宗教マイノリティとして1200年以上、生きながらえていた。1980年代には、ダライラマ14世がボン教徒に対する差別を禁止し、チベット亡命政府はゲルク派、サキャ派、カギユ派、ニンマ派という4大チベット仏教宗派にボン教を加えた5つを、チベットの伝統的な宗教と定めた。以後、ボン教は、仏教にならぶチベットの伝統宗教としての地位をとり戻した。
2. 講書始の儀：天皇陛下が各学問分野の第一人者から講義を受けられる新春恒例の皇室行事。2022年は、1月14日の午前に、皇居・宮殿「松の間」で開催された。講義したのは御牧克己・京都大名誉教授（74）＝インド・チベット仏教学＝ら3人。

<研究者のコメント>

産業革命以降、人類は爆発的な経済発展を実現し、多くの物質的な豊かさを享受できるようになりました。しかし、資本主義の拡大により、一部の人間だけに富が集中し、貧富の格差は拡大する一方です。経済などの格差の是正は各所で訴えられるものの、すぐにさま改善することは困難でしょう。そこで、本書では、「弱者」が弱者のまま前向きに生きるための知恵を、ボン教というチベット・ヒマラヤの古代宗教から抽出し、和文書籍という形で世に公開しました。ポスト資本主義に向けたアイデアの1つとして、人々と社会に前向きさと安らぎをお届けし、そこから新たな活力と希望が生まれ、躍動的な社会が実現することを願っています。

